

小十郎と千代（7）

松永ひろし

2023.10

白い息

十九歳の剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の代稽古を終え、朝方の小雪が蓋に残るはねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。「じゅつじゅつ、けさも さむいな。ほら、いきが しろいな」

と聞いて、千代が「ふう」と白い息を小十郎の顔に吹きかけた。すると 小十郎は、

「あつ、かくのとおり 真っ白です。ふう」

と白い息を千代の顔に吹きかえした。

「むむむっ、やるか、じゅつじゅつ。フッ」

千代が口をすぼめ、小十郎の顔面に勢いよく息を吐いた。一瞬眼をつぶった小十郎が、

「ならばわたくしめ」

と千代の顔を目掛けて強く息を吹きかけた。

「まて、まて、やめじゃ やめじゃ。きりがなしじゅつで、じゅつじゅつ、さむいひに、いきがし

さしくふきあつのじゃ。ふう」

初夢

師走の二十八日。齋藤又右衛門道場の門弟に年納めの稽古をつけた剣士・桜木小十郎が、ナンテンが赤い実をつけるはねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。千代が訊いた。

「じゅつじゅつ、はつゆめとは いつ みるゆめのじゅつじゃ」

「新しい年になって最初に見る夢なので、一月一日から二日の間の夜中でしょうかね」

「うるさちが いちふじ にたか さん…なんとかいったぞ。なんのことか わかるか」

「一言十二鷹三なすびですね。初夢にそれらが出たら縁起が良いといわれております」

「なすびとは なんじゃ」

「ナスのことです」

ろくなるのは なぜじゃ」
「はて、なぜでしょう。考えてみますに、水を入れた薬缶を火にかけますと、やがて注ぎ口から白い湯気がたちのぼりますね。沸いた薬缶をそのまま火にかけておきますと、中の湯はどんどん減ってしまいます。」

と聞いては、湯気は湯が姿を変えたものと考えるが妥当。湯気は薬缶の注ぎ口から飛び出た時、白く色づきます。まるで空気にふれ、冷まされたからこのように見えます。同じ理屈で、お千代さまやわたくしの体に含まれる温い水っ気が息として外に出された際、冷たい外気にふれたことで、白く見えるようになったとも考えられる気がします。なぜ白い色なのかは、わかりませんが…」

「むすかしのじゅつは ちよは わからん。わかるのは、さむいひ しろいいきを かけあつあそびはたのじゅつじゅつじゅつじゃ」

「お千代さまは先ほど途中でやめられました」

「じゅつじゅつじゅつが、じゅつじゅつじゅつを ぶいたからじゃ。じゅつじゅつじゅつは、いきが しろくみえぬ。いきは や

「なすなら なすといえはいいのに なにゆえびをつけ なすびとするのじゃ」

「そもそもは夏に実をつけるので夏実（なつみ）と呼び、なまつてナスビとなったとか。ほかにも諸説あるようですが、ナスビの呼び名は、ナスよりも古くからあったようです」

「ふん。ところでなせ なすのゆめをみると えんきが よいのじゃ」

「なすの語音が『成し遂げる』の意味の 成すに通じるからといわれております」

「そうか。ふじと たかと なすじゃな。ぜったい夢にみるからな」

千代は、フンと鼻をならした。
そして正月二日。小十郎が齋藤又右衛門宅に新年

の挨拶に向くと、千代が走り寄り、
「じゅっつ、ゆめを わすれた。こまった、みたかどうかも わからぬのじゃ」

としく残念でたまらない様子。小十郎が、
「では初夢は来年のお楽しみですね」

「じゃ。ゆめを とりまです」

「はて、いかよう」

「ははづえが いったぞ。バクなるものが ひとのゆめを くうのだと。ちよのゆめも たべたに ちがいない。つかまえてまいれ」

縁起よい夢

正月五日。剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の門弟に年初めの稽古をつけたあと、赤い実が二つ残るナンテンの横の、はねつるべ井戸のわきで体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。
「じゅっつ、ちよは やっと はつゆめをみたぞ」

正月五日に見た夢がはたして初夢とよべるのか、小十郎はとまどったが、尋ねた。

「富士とか鷹とか茄子とかあらわれましたか」
「それらは あらわれんで、うさぎが いたぞ。こじゅっつ、うさぎは えんきよいか」

「ウサギという動物はお月さまの使いともいわれま

す。うさぎは幸いをよびこむ 付き に通じます

から、よい夢だと思われます」

「そうか、きいて あんしんした。いなばの しろしむのやうに みぐるみはがれたら たまらんかな」

「おや、お千代さまが見た夢のウサギは、白ウサギでしたか」

「いや、すきとおっていたぞ。みみが ながいのでしむきだと おもったわけだ」

「ほおー。透きとおっていれば、先が見えますね。それはかぎりなくよい夢と思われます」

「なば、じゅっつ。このさき ちよに どんないじょうが あるとおもっつ」

「は、じゅっつ。言くじがあたるとか」

「じゃ、お年玉がもらえるとか」

「おとしましたか。んっ、じゅっつからは だもらってなかったな」

「小十郎は齋藤家の者ではいけません」
「すが、あゝのじゅっつ、おとしましたまを わ

たすは よのならいだと きいたぞ」

「ならば、いかほど。三文は三文芝居、二束三文などよい意味で使われませんし、六文は三途の川の渡し賃。縁起でもありません」

「じゃ、じゃ、じゃ。こまかなせには いらん。」

「じゅっつ、そいふこと よいせ」

どんど場の草刈り

陸月十四日。十九歳の剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が入ってきた。千代は五歳。気ままでわがまま。手拭いで鉢巻きして、右手に鎌。小十郎は訊いた。

「お千代さま、すいぶん勇ましいいでたちですね。討ち入りでもなさるのですか」

「そうではない。きはほりぞいの あきちの かねくちを かるのじゃ」

「なんのため」

「ちんぢやきじゃ。ちよは こんかいようやくど
んぢくりに くわわれるとじじゃ」

小十郎は得心した。どんど焼きの場所となる空地
の枯れ草をあらかじめ刈るのだ。

「じゅんじゅん いくか」

「どんど焼きは子ども行事。ですので、小十郎は
遠慮いたします」

「うまい」をいって、のがれるきだな」

本所横堀の鐘が八つの刻を告げた。千代は不服そ
うな顔のまま枯れ草刈りに出向いた。

千代と仲良しの武藤早紀も、遊び仲間の親分鶴吉
も、木場堀をはさんだ隣の堀江町だから、どんど場
は千代とは別だ。千代を見送った小十郎は、（淋し
かったのかな）と気になった。そこで、ようす見に
木場堀へ向った。

栄町のどんど場は広さ一畝（約一アール）あまり
で、小十郎の顔の高さまでの枯れススキが群れてい
た。子どもたちはその中に入り、鎌でススキの幹を
刈っている。

（これは、お千代さまにはかなりの重労働だ）

一人の男の子が、

「たしか、おまえは齋藤道場の孫娘だな」

と千代に声をかけた。前髪姿の背の高い子だ。千代
が「クン」と頷くと、その男の子は、

「どんどは初めてみてえだな。なら、ほかの子と一
緒に注連飾りをあつめるんだな」

と「いや、後方の女の子たちを振り返り、

「おい、菊、この子にもませてやんな」

と呼びかけた。呼ばれた娘が顔を向けて、

「はいよ、女わらし、じゅんじゅん」

「いわれたまま千代が近づくと、

「あたいが菊だよ。これから家々を回って松飾りを
あつめるけど、その前に嬢ちゃん、なんていう名だ
ね」ときいた。千代が、「ちよだよ」というと菊は
他の女の子たちに告げた。

「みんな、この子はお千代ちゃんだ。なかよくだの
むよ。それじゃあ、いじゅん」

栄町一帯は武家屋敷が多い。齋藤又右衛門道場向
いには讃岐藩一万石松平伊豆守の下屋敷もある。菊
は、女の子たちを引き連れて侍の家や表通りのお店

と小十郎が思ったとき、ススキの中から千代の声が
響いた。

「じゅんじゅん、ようきた。めんきょかいでんのう

でで ススキを きりまくれ」

「刀はススキを刈る道具ではありません」

「なら、ちよの かまをかそつ」

「鎌を貸してお千代さまはいかがなされます」

「ちよは はたらきづかれた。おちゃをのんで こ
はんときほど きゅうけいいたす」

注連集め

陸月十五日。本所横堀の鐘が明け六つを知らせる
と、齋藤又右衛門の屋敷で千代が飛び起きた。寝間
着を赤い普段着に着替えると、包丁の音がする勝手
に向け、「ははうえ、いってまいります」とつげて
表にとびだした。

木場堀脇のどんど場には栄町一帯の子どもが集ま
っていた。それも、千代がふだん遊ばない武家の子
たちたちがほとんどで、千代は身をかくした。と

や裏長屋を巡り、

「はい、こんちはあー。あたいら道祖神さまのつ
かいだよ。正月飾りをもちろつよー」

と大声で告げては表に飾られた松飾りはずした。
それを女の子たちに持たせ、両手で抱えきれないほ
どになった子には、

「そいつをどんど場に置いといで。あとはおのこた
ちにまかせな。櫓に飾ってくれな」

と「いって、どんど場に向わせた。

千代は三度、どんど場に運んだ。行くたびに松と
竹を芯とした道祖神の櫓が大きくりっぱな姿になっ
ていく。千代の心は躍った。

どんど焼き

栄町界隈の家々を回って松飾りを集めた菊たちお
なご衆が、にぎやかに話ながらどんど場にやってく
ると、そこには、男の子たちが建てたどんど場の櫓が、
二階家の庇ほどの高さで聳えていた。櫓のつっぺん
で大きな赤ダルマが青竹の先のっている。その下

は、頭から底に藁縄を通した小タルマが、数珠玉状で三重に巻いている。藁束を巻いた胴には、松飾りの松の枝が突き立ち、いくつかは書き初めの紙を刺していた。櫓の底は注連縄を縦に並べて縄で巻いている。にっこりした菊が、

「お兄さま、みごとな櫓ができましたね」と前髪姿の少年に声をかけた。少年は、

「新之介の屋敷裏の竹林から孟宗竹を五本ももらえたから、芯ががっちりできたさ。どんどが燃え上がったあとも楽しみみだぜ」

といつて得意そうに鼻をこすった。

「そうさ、パンパンパンパンうるさいほど音たてて竹がはじけるぜ。楽しみにしてな」

と横に立つ少年がいう。千代はその子の顔を知っていた。たしか鶴吉の前に、この辺りの子どもともめ役だった「しんちゃん」という子だ。そう気づいた千代は緊張っていた思いがふつと和らぐのを感じた。

前髪姿の少年が子どもたちを見渡して、

「みんな、ご苦労だった。こんなにもりっぱなどん

どの櫓ができあがった。ありがとう。あとは町役さんたちが仕切るから、みなは一まず家に帰り、刻の鐘が八つを知らせた頃、またここに集まってくれ」

そして八つ半過ぎ、町役の越後屋幸兵衛の手でどんどの櫓に火が入り、やがて聳えた櫓が真っ赤な炎につつまれた。途端、

パン、パン、パンパンパン……

と賑やかな破裂音があたりに響いた。

母の千鶴と握りあつた手を放した千代が、手のひらで耳を塞ぐ。闇の中で誰かが、

「今年のとんどは賑やかでいいじゃねえか」

すると、応えるかのように、パンパンッと音がして、パツと火の粉が闇空に弾けた。

節分の豆

如月四日。十九歳の剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の代稽古を終えて、はねつるべ井戸のわきで体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘千代が近づいてきた。千代は五つ。左手の白い布

袋に右手を入れ、なにやらつまみ出して口に運んでいぬ。

すると千代が訊いた。

「じいぢゅじゅじゅま たべるか」

「なにをですか」

「まめじゃ。い(炒)った まめじゃ」

「ははあ、お千代さまのお屋敷では昨日、節分の豆まきをいたしましたな」

「そうじゃ、おにはそと ふくはうちと おおこえでな。そのあととしのかずだけ まめをたべたが、ちよは五つなので たべたりん。だから、ははうえのすきをみて このふくらに まめをつめこんだのじゃ」

「頭の黒い大きな鬨が悪さしたわけですね」

「じいぢゅじゅじゅ、おおきくはないぞ。ねずみだからチノウだ」

「おや、お千代さま、知恵づきましたね。鬨だから中ですか。一本とられました」

「じいぢゅじゅじゅ。きのう まめまきしたは なぜじゅ。きのうはとくへつな ひなのか」

「はい。昨日如月三日は今年の暦で冬の季節が終る日。今日四日は春が始まる日です。春という新しい季節を迎える前に悪い鬼を追い払っておこうというのが節分の豆まきです」

「まめをぶつけられたら いたいぞ。だからいたくておには にげだすのか」

「そういう鬼もいるかもしれませんが、豆はお米と同様、食べれば力が湧きます。それは鬼を追い払う力でもあるとされます。また、魔物を滅するの「魔」と「滅」から豆となったという説もあり、鬼を追い払った豆を食べると病気や災難からのがられるそうです」

「ふん、まめをたべると びよつきにならぬのか。ちよは たくさんたべたから このさき すうーっ と げんきだぞ」

だが、豆を食べ過ぎた千代は腹をこわした。